

第3回みなまた地域創生ビジョン研究会

平成28年5月22日（日）

【岩橋室長】 開会に当たり、この場所を本日ご提供していただいております水俣環境アカデミアの古賀所長から一言ご挨拶をお願いしたいと思います。

【水俣環境アカデミア（古賀所長）】 皆さん、こんにちは。本日は水俣環境アカデミアにお越しいただきましてありがとうございます。このアカデミアは4月30日にオープンしたばかりでありまして、この水俣でのさまざまな活動に、世代を超えて、あるいは立場を超えて、広く皆様方に活用していただきたいと設立したものであります。

ごらんのように非常に自然環境に恵まれておりまして、ちょっと雨が降ると、カエルやこんな大きなアオダイショウが出てきます。自然と人間、それから、地域と人、人と人とのつながりを考えるには絶好の場所かと思っております。もちろん我々は、かつての水俣病の教訓を引き継いでいかないといけません。これを活用して次の新しい水俣をつくっていきたい、その一助になればということで、皆様方の活動の場にしていただきたいと思います。

本日は、岩橋先生をはじめとして、国立水俣病環境総合研究センターの望月所長、大竹課長にもおいでいただきました。この場所をぜひ国水研の活動の一つの拠点としても使っていただければと思っております。

館内いろいろな施設がまだまだ不十分ではありますが、たくさんの方々に会議等あるいは夜遅くまでのディスカッションの場として使っていただく、あるいは、少しぐらいお酒の入る場があってもいいのかなと思っております。そういった様々な活動に今後とも使っていただきたいと思います。

これからもよろしく願いいたします。どうもありがとうございました。

【岩橋室長】 ありがとうございました。

それでは、ただいまから「みなまた地域創生ビジョン研究会」第3回会合を開会させていただきます。

委員の皆様方には、ほんとうに大変お忙しい中お集まりいただきまして、まことにありがとうございます。とりわけ永松座長におかれましては、ご自宅及び研究室ともかなり被災をされている中、今日は無理をおして来ていただいております。どうもありがとうございます。

います。

まず、本日の研究会の出席状況は、全委員数8名のうち、6名の委員がご出席されておられます。

次に、資料の確認と取り扱いについてご説明いたします。お手元にお配りしております議事次第、1枚めくっていただきまして、資料1の「委員名簿」、1枚めくっていただきまして、資料2「研究会の趣旨等について」、2枚めくっていただきまして、資料3「第2回の意見の概要」、これが8ページまでございます。資料4「目指す地域社会像の方向性について」が3枚あります。参考資料1「フューチャーセッションの成果」が3枚ありまして、一番最後に参考資料2「厚生労働白書の抜粋」をお配りしております。

資料と参考資料には、右上に四角の囲みでそれぞれ表示をしておりますので、そこを見てくださいと開きやすいかと思います。また、資料ごとに左上をホチキスでとめておりまして、ページの番号は資料ごとに2ページ目からつけております。一つ一つ資料をご確認いただき、もし不足している場合にはお申しつけください。

本日の資料やご意見等については、原則全て公開といたしまして、後日、発言者名を示した議事録を各委員にご確認いただいた上で公開させていただく予定です。

それでは、カメラ撮りはここまでとさせていただきます。この後の議事進行につきましては、永松座長にお願いいたします。

【永松座長】 皆さん、お忙しいところご出席いただきありがとうございます。

今日の会議の進め方といたしましては、前回の会から少し時間があきましたので、改めて本研究会の趣旨、目的なりを再確認した上で、前回までの議論の概要をもう1回おさらいしたいと思います。それから、目指す地域社会像の方向性について、事務局から説明していただきたいと思っています。議論を集約する必要がございますので、特徴ある報告書をつくるという観点からもある程度絞りたいと思っておりますので、委員の皆様から方向性について議論し、意見をいただきたいと思っております。その次に、その方向性を具体化するためのコンセプトなりアプローチなりについて、皆様のご意見を承りたいと思っております。

それでは、思い出していただくことも踏まえまして、資料のほうを事務局から説明してもらいたいと思います。よろしく申し上げます。

【岩橋室長】 それでは、事務局から資料をご説明いたします。できるだけ意見交換の時間をとりたいと思いますので、資料の2、3、4と続けて説明してまいります。

それでは、資料2をお開きください。

まず、本研究会の目的は、水俣市との協定に基づいて、未来思考のまちづくりを推進するために研究会の成果を研究会報告書として取りまとめていただくことです。国水研では、この研究会の報告書をもとに、水俣市への政策提言を行う予定です。

また、資料2に握手のポンチ絵の下に「未来思考」という言葉がございます。これは既存概念や潮流にとらわれず、水俣地域の長期的な発展のために目指す地域社会像、すなわちビジョンと言われるものを想定し、それを実現する施策や事業などを検討していくことです。そのため、2コマ目にありますように、フューチャーセッションを開催して市民のアイデアを引き出し、その都度未来新聞を作成し、この研究会に市民のアイデアや意見をつないでおります。そして、最終的には、虹の絵の下にありますように、政策から市民活動まで幅広く反映されることによって、みなまた地域の地域創生に貢献して、幸せを実感できるまちの実現に役立ちたいと考えております。

3コマ目に、本研究会における地域創生の趣旨を書いております。本研究会における地域創生とは、いまだに水俣病の影響が続いている一方、地域社会の変化やライフスタイルの多様化が著しく進んでいる中で、長期的・広域的な視点から、地域にあるものを活かして目指す地域社会像、すなわち、ビジョンを実現することだと考えております。

囲みの下に、従来からの地域「再生」と今回の地域「創生」のポイントを簡潔に対比しております。「創生」は、これまでの「再生」とは全く異なる状況のもとで行われるもので、長い目で、水俣市だけではなくもう少し広域的に、そして、ないものねだりをするのではなくて地域にあるものを活かす、この3点がポイントと考えております。

4コマ目にいきまして、一つ目のポイントであります「長期的視点」をこの図に描いております。「長期的」とは、おおむね10年先を一つの目安としております。10年先のビジョン、目指す地域社会像を先に決めて、次に、それを実現するための方法を考える、これが先ほどの協定にいう「未来思考」の大きな特徴です。

次に、二つ目のポイントである「広域的視点」です。4コマ目の右下のほうに九州地図を簡潔に描いております。この水俣市とその周りの市や町まで含んで捉える、これが「広域的視点」というものです。

そして、続く5コマ目に三つ目のポイントである「地域にあるもの」として、さしあたり水俣市で思い浮かぶものをここに幾つか列記しております。この中には、水俣特有のものもあれば、よその市や町にもあるものも含まれております。

最後に6コマ目をごらんいただきますと、第1回の意見の概要を、ほんとうにポイントだけ挙げておりますので、簡潔に振り返りたいと思います。

一つ目は、ビジョンということで、一点突破型のビジョンがいいのではないか。二つ目は、環境と健康ということで、「美健」のまちというのはどうだろうか、そして水俣モデルのパイロット的な取り組みができたらいというご意見がありました。三つ目の情報発信につきましては、過去のをそのままアピールするよりは、広島のように新たなイメージを使ってアピールする方法がいいだろうといったご意見が出ておりました。

続いて、資料3です。こちらに前回（第2回）の意見の概要を事務局で4点にまとめております。

一番上の点線枠囲みの中に要点のみを書いておりますので、まず要点を振り返り、その後、一つ一つそれぞれ読み上げてまいります。

まず一つ目は「広い意味での「健康」を大きくりのテーマとする」ということです。めくっていただいて3ページ、二つ目が「未来思考で、地域にあるものを活かしてビジョンを設定する」ということです。めくっていただいて、5ページ、三つ目が「ビジョンのターゲット（世代・対象者）を絞る」のがよい、めくっていただいて、6ページ、「ビジョンを実現するために、市民の自発性を引き出す」ことが非常に大事だということ。このように、おおむね4点のご意見が出ておりました。

1ページ目にいきまして、まず、広い意味での「健康」に関して、永松座長から、「水俣病の教訓という場合、環境や健康の大切さを世界に知らしめること」、二つ目が「地域とのつながり、人間関係、生きがいで広げて、「健康」という大きなくくりで使ったらどうか」というご提案、三つ目が「孤独感を感じて、一人で誰とも話さない老人ほど身体機能の低下や、死亡のリスクが高くなるという報告がある」ということでございました。

続いて藤本委員から、「健康という大きなくくりの中で、ほんとうに地に足のついた水俣市への政策提言は、市民をどう動かして、市民にどうやる気を起こさせるか。生きがいや人とつながることをもう1回思い出してほしい」というご意見がありました。

石原委員からは、「健康に焦点を当てて、地域のきずなをどう取り戻すのかということも含めてみるとおもしろいと思う」というご意見がありました。

植木委員からは、「家族、家庭の中での健康に対する意識を変えていくようなモデルができたらい」、二つ目に「カキ小屋のように新しい取り組みを行い、水俣病の経験を踏まえて乗り越えているということがストーリーとしては美しい」というご意見がありました。

めくっていただいて、2ページにいきまして、勢一委員から、「環境での成功体験を「健康」のプロジェクトにつなげるようなことができれば望ましい」というご意見がありました。

牧迫委員から、「健康だけでは、水俣でやる強みが少し薄い気がする」、二つ目に「具体的な目標があると、そこから波及していろいろな効果があることが大きいのではないかと思う」というご意見がありました。

3ページにいきまして、「未来思考で、地域にあるものを活かしてビジョンを設定する」ということに関して、永松座長から「これまでの水俣病対策は、問題解決志向型だった。一方、未来思考では、ビジョンを最初に設定して、それに近づくためにどんなことをやればいいのかを考えていくアプローチが必要だ」というご意見がありました。

深水委員からは、「水俣は、地域を非常に大事にしており、横のつながりが強い。うっとりという方もおられるかもしれないが、皆さん、とてもいいところを持っておられる」というご意見がありました。

勢一委員から、「「健康」というキーワードは、すばらしい環境があつてこそだから、これまでの蓄積の上に、次は何を重ねることができるのか。環境は、達成してもなお重要なキーワードであり続ける」というご意見がありました。二つ目に、「当たり前だと思っていたことが、実は、外から見たら全然当たり前ではない価値があることを考え直すことは、シビックプライドというキーワードで言われ、その作業は地域の誇りには大切なことである」というご意見がありました。

牧迫委員から、「未来思考をどこまで見ていくか。ちょっと先で効果を見ようとすると、ゼロから生み出すのは厳しい」というご意見がありました。

松永委員からは、「過去にとられるのではなく、地域の歴史・伝統・固有性を踏まえたところに未来がある。外から全然違うものを持ってきてもあまり意味がない」、二つ目に「小さくてもいいから実効性があるものを盛り込む必要がある。それはできるだけ市民から出てきたものにする」というご意見がありました。

5ページにいきまして、三つ目の「ビジョンのターゲット（世代・対象者）を絞る」ということに関して、石原委員から、「水俣の中でも世代によって認識が違う」、二つ目に「どの世代がどういう思いを持っているのかを考えながら進めるといい」というご意見がありました。

永松座長からは、「65歳を過ぎると、一番の関心は健康になる」「地域おこしに一番関心

があるのは若い世代」、三つ目に「漠然と市民と言うよりも、ある程度ターゲットを絞って、その人たちに最も効果的なプログラムを提供していく」というご意見がありました。

藤本委員からは、「子供が次の時代をつくっていくので、子供目線でつくり上げていかなければいけないのではないか」、二つ目に「住民が地元で愛着を持ち、子供がしっかりと育っていくというところも方向性として持ってもらいたい」、三つ目に「積極的になれない高齢者世代も、孫のためには前に出てくる方もたくさんいると思うので、そういう意味で子供もキーワードに入れるといい」というご意見がありました。

6ページにいきまして、四つ目の「ビジョンを実現するために、市民の自発性を引き出す」ということに関して、牧迫委員からは、「何か一部でも市の政策や事業の1個に乗るような形で発展していく可能性があれば、参加する方も本気でこの市や地域のことを考えて、未来を見てくれるだろう」というご意見がありました。

永松座長からは、「行政がどんなに旗を振っても、当事者たちがその気にならない限り、地域は元気にならない」、二つ目に「ごく普通の人たちが、一步一步、自分たちでやりたいこと、実現したいことに向かっていく、そこにやりがい、楽しさ、充実感などを見出すのが健康につながるだろう」、三つ目に「地元の歴史は自分たちがつくっていくという気持ちになるのが一番大事」、四つ目に「課題は、水俣にいる人たちがあまり動かず、周りの人たちが一生懸命に来ては手伝うという形を少しずつ変えていくこと」というご意見がありました。

藤本委員からは、「私よりも上の世代は、「諦め感」が強い。地域の人たちがやる気を出せるかどうかのポイント」、二つ目に「市民の小さな意見が形になることの積み重ねによって、市民の「諦め感」はやる気へと変化していくだろう」、三つ目に「地に足のついた水俣市への政策提言は、市民をどう動かして、市民にどうやる気を起こさせるか、生きがいや人とつながることをもう1回思い出してほしい」というご意見がありました。

7ページにいきまして、石原委員からは、「住民が動かないと何も動かない。住民が提案して、住民が主体でやるものにできるといい」というご意見がありました。

松永委員からは、「「実現できる」ということを子供や住民に理解してもらえると、自分事として考えられること」、二つ目に「ある地域では、子ども議会で提案されたものを実際の議会、市役所が予算をつけて実施している」というご意見がありました。

めくっていただいて、8ページに簡単なイメージ図をつけております。

一番上に水俣病の発生があり、これまで「環境」という面と「健康」という面でそれぞ

れ対応し、「環境」のほうは、「環境モデル都市を目指す」ということで、それは叶い、その後、「水銀に関する水俣条約」外交会議が開催されております。一方、「健康」のほうは、90年代初めから「もやい直し」に取り組み、人間関係の修復というものはある程度進んだと思われませんが、その一方で意外と健康ではないということが、第1回のときの市の職員さんからの報告で明らかになったところです。

そして、真ん中にちょっと薄く書いておりますように、地方創生法というものもつくられまして、地域社会の変化やライフスタイルの多様化が著しく進んでいる中で、これからのビジョンをどうしたらいいだろうかということが問題となっているわけです。

その下に赤い文字で書いておりますところが、第2回の意見交換の中で出たことで、今まで読み上げてきたことです。(1)の「広い意味での健康」、そして「未来思考で、あるものを活かしたビジョン」、そして、一番下に雲のように書いてありますが、「美しい環境のもとで」「ターゲットを絞る」「自発性というものを引き出す」ということで、ここでビジョンが描けたらなというところです。

今日は、このビジョンの方向性を先生方に決めていただくことが狙いです。

続きまして、資料4にいけます。

資料4のタイトルの下に、枠囲みで書いておりますとおり、本日は第1回と第2回の議論と、これまで19回実施しておりますフューチャーセッションで引き出した市民のアイデアや意見を踏まえて、目指す地域社会像の方向性の決定に向けて議論をしていただいて、決めていただきたいというのが今日の一番大きな目標です。

これまでの趨勢といたしまして、「健康」を大きくくりのテーマにしようということでございましたので、資料4の2コマ目に「健康」に関連する事象やギャップを挙げております。

まず、一つ目、二つ目、赤で書いてありますが、一つ目は、水俣病を経験したにもかかわらず、生活習慣病というものが著しく多く、また健診率が低いということが1回目の研究会で報告されました。そのときの意見交換では、上の世代には諦め感もかなり影響しているのではないかとのご意見があったところです。

二つ目は、子供さんの肥満傾向が見られるということで、小中学生の全学年にそのような統計値が出ております。

続きまして、めくっていただいて、3コマ目では、今申し上げましたように、表面にあらわれた事柄をもとに、もうちょっと深く問題意識として捉えてみたことを幾つか挙げております。

一つ目は、大人の生活習慣病というものは、どうしても同じ物を食べますので、子供さんに伝わってしまうということ、一方、大人は自分自身は変えられないとしても、子供のためだったら多分変わっていきけるだろうということ、三つ目は、特に退職後の男性には生きがいや居場所が必要だということ、四つ目は、10年先には今以上に認知症の予防が必要になるということ、これらを今強く感じているところです。

このような問題意識を持ちまして、この研究会と並行して、4コマ目の写真のように、子どもセンターとふれあいセンターという場所をそれぞれ借りまして、1回につき2時間半ぐらい時間をかけて、その都度テーマを設定して市民の方のアイデアを引き出して、その都度、未来新聞というものを作成してきました。この研究会と並行してやったフューチャーセッションの未来新聞の現物を、今日、あちらに4点掲示しています。また、参考資料1の8コマ目、9コマ目、10コマ目、11コマ目にも挙げております。

そして、5コマ目をごらんいただきますと、さまざまなアイデアやご意見をこれまでいただきました。特に左上の雲の中、ママさんの声としているところですが、「おじいちゃん、おばあちゃんに自分の子供をかわいがってもらって、その経験をちゃんと覚えていて、その経験を抱いて成長して大人になってほしい。そして人の温かさやぬくもり、そういったものを覚えておいてほしい」といった声がありました。また、右上の雲の中、60代の市民の声と書いているところですが、「リタイア後の男性には生きがいや居場所が特に必要だ」といった声がありました。これらの声から健康なまちづくりのアイデアというものをフューチャーセッションを通じて、引き出してきました。

一番上に「健康まちづくりのアイデア」ということで、一番大きな雲を描いております。

その中のまず①は、遊び場に関するものです。例えば、遊び場に遊びマイスターとか、遊びコーディネーター、高齢者による見守り隊、これらは特にリタイア後の男性の活躍の場づくりというものを考えたアイデアです。

②は、デイサービスで子供さんとママさんと、そこに来る通所者が一緒に手遊びやリズム運動、手伝い、味見などをしてほしいというアイデアです。

参考資料1の9コマ目の未来新聞では、デイサービスはもはや老人だけの場所ではないということ、介護予防で行われている手遊びやリズム運動を、自分の小さな子供を連れて来て、親も一緒にやりたいという若いママさんからのアイデアがありました。これには私もびっくりしました。

このようにフューチャーセッションで引き出したさまざまなアイデアをまとめて捉えま

すと、資料4の5コマ目、オレンジ色の絵の中に書いておられますとおり、「交流」という共通する言葉がキーワードになるのではないかと思った次第です。

そこで6コマ目に推論として、「子供・保護者・元気な高齢者の交流は、みんなにいい」としました。これは健康面での相乗効果を幅広く得られるということです。交流をするとみんなにいいだろうということから、水俣のこの美しい環境のもとで、3世代を育む健康なまちを目指すのがいいのではないかと考えているところです。

一応、ここまでです。

【永松座長】 ありがとうございます。

議論に入る前に、今日ご欠席の植木委員から簡単な意見書が出ているとのこと。今からそれをお配りしますので、事務局から説明いただいた上で議論に入りたいと思います。

【岩橋室長】 左上に【植木委員事前意見①】と書いているペーパーを今お配りいたしました。これはメールで皆さんにお送りした問いかけの中の一つです。3世代の日ごろの交流ということよりも、ほかにいいキーワードがあるのではないかとということで書いていた分です。メールで来ましたので、そのまま読ませていただきます。

星印のところから、「リレー、渡す、つなげる、3世代で未来に渡したい、渡すことをみつけて考えて一緒に行動する。例、みなまた3世代リレー、3世代三代で取り組む〇〇〇！。公表して優秀な取り組みは表彰する」というご意見でした。

【永松座長】 植木委員からのご意見は、どちらかというと言葉の選び方の話だと思えますけれども、これまで事務局に説明いただきましたが、皆さんに意見交換いただきたいのは、一番最後のほうの、ここの部分の下のほうですね。これまでの議論を踏まえて、フューチャーセッションではこんな感じでしたという、この1枚紙を見ていただいて、ある程度、視点を定める必要があろうということで、事務局側の一つの提案として、「3世代で育む」という視点で健康というのを眺めてみて、いろいろな取り組みとかイメージをつくっていったらどうかという提案です。それに関して、何でも結構ですので、委員の皆様からご意見をいただきたいと思います。

順番にお聞きしてよろしいでしょうか。強制的に。(笑)

松永委員からお願いします。

【松永委員】 コンセプトというか、全体像としてはすごくわかりやすいですし、絞れている面もありますし、懐が深いといえますか、いろいろなものが含まれるものになっているので、その点はすごくいい気がします。

「交流」というキーワードが出ていて、その上の図を見ますとまちづくりのアイデアが幾つか出ています。確かにこういうまちづくりのアイデアはすごくおもしろいと思うんですが、実際にここに参加する子供や高齢者などの動機づけをどうデザインしていくかが、かなり重要になると思うんですね。

例えば、デイサービスで高齢の方と子供さんが一緒に何かやる、昔の遊びを教えますみたいなことは、デイサービスかどうかは別にして、実はいろいろな地域でやっていますが、大概うまくいかないんです。うまくいかないのは、そもそも子供は昔の遊びをそんなに知りたいのかということもありますし、お年寄りの方が昔の遊びを教えるときに、教え方やコミュニケーションの仕方とかが身につけているのかといったことがあります。その点をきちんとデザインしたり、仕掛けを考えたり、ツールを準備しないと難しいところがあります。

私も、北九州で大学生とアクティブシニアの交流みたいなことをやっています。地域でソーシャルビジネス的な活動を企画する中で世代間のダイアログみたいなことをやるんですが、なかなか難しいのが現状です。何でかという、アクティブシニアというのは50代から70代ぐらいの方が対象なんですけれど、最初は手探りで大学生としゃべっているんですけど、だんだん自慢をし出す、説教をし出す、教え出すというかんじになってきます。ダイアログや対話ではなく「昔はね……」みたいな、「大体最近の若いやつは……」みたいなトーンになってしまうんです。その辺をどうつくるのかなというところあたりが鍵になってくる気がします。

【永松座長】 ありがとうございます。確かに、今言われたことは全部当てはまります。行政のほうでも、各分野でいろいろな取り組みをやっているんですけど、言われているように、受ける人たちの関心がずれているというか、関心がないのに連れてこられたりしてもおもしろくないし、教え方もまさに言われるとおりです。私も最近授業で「大学生のころは……」ということを書いて、ああそうかと思った次第です。(笑)

確かに、伝え方のトレーニングというんですか、年をとっているから何でも知っているだろうと思うのが間違いだということもありますね。ここは、今日というよりも、おそらく次回あたりに議論いただく部分になると思います。ありがとうございました。

じゃあ、牧迫委員お願いします。

【牧迫委員】 いろいろとご説明ありがとうございました。私もお聞きしまして、全体的な方向性というか、概念には非常に同感いたしました。

そして、いろいろアイデアがございすけれども、おそらくそれぞれうまくいくための方法論というはあるんだと思うんですけれども、先ほどあったように、これがうまくいって、いなくてというのが出てきてしまうと思うんですけれども、全体でそれがどういうことを目的とし、意図しているのかというのは、やっぱりビジョンとしてあるべきかなと思います。そういった意味で一つ、「3世代でつないでいく」という大きなテーマがあるというのは、着地点としては非常にいいのかなと考えております。

私は、所属している施設柄、高齢者を対象にする研究調査が多いんです。今、老年医学会のほうでフレイルという概念が非常にトピックになっているんですけれども、日本語にすると虚弱と言われていたものです。虚弱というどうしても不可逆的なイメージがありましたので、フレイルという横文字にしております。身体的なフレイルが非常に注目されがちではあるんですけれども、もともとの概念はもっと広くて、知的な能力もそうですし、社会的な問題もフレイルです。例えば、独居ですとか、交流が減る、外出が減る、これが大きな取り巻きとしては非常に大事と言われておりますので、そこを何とか維持していく、少し落ちてきた方であれば、なるべく外に出て交流するように促していくんだという方向性は、大きな予防という概念で非常にいいのではないかと感じました。

ちょっと済みません、具体的にこれをこうしてこうすればというのがなかなかないんですけれども。

【永松座長】 いえいえ、まだ方向性を議論いただく段階ですので、思いついたレベルで結構です。

【牧迫委員】 よろしいですかね。

【永松座長】 はい。ありがとうございます。

【牧迫委員】 先ほどありましたけれど、それをやることの動機と、やって実感する効果がないと、なかなか継続しないんだらうなと考えております。まだ言えない情報もあるので後ほど議事録を修正させてもらうかもしれないんですけれども、一応、我々のところの取り組みでは、外に出るような活動をご自分でモニタリングするようなシステムを今つくっております。それが何かしらのリターンとして返ってくるような、例えば今、いろいろなところでやっていますけれども、ポイント制にして、なるべくたくさん外出した人には何とかポイントみたいなのがついて、そうするといろいろなところに出かけるようになるという仕掛けをしております。それもうまくいくかどうかわかりませんが、何かこういうことをやるとこうなるという、参加することの利点、メリットを感じるという

体系も必要かなと感じております。

【永松座長】 ありがとうございます。意欲が湧くような工夫をするということですね。

【牧迫委員】 なるべく継続できて、やっていいなと感じるものがあるといいかなと思います。

【永松座長】 多分、最初の動き出しの部分でそういうのがあって、やってみてだんだんおもしろくなってくれば、後は自立的になると思うんですけど、最初は、楽天カードじゃないですけど、何かのきっかけが必要だという。

【牧迫委員】 それがいいかどうかわかりませんが、そういうことがあってもよろしいのかなという気はしています。

【永松座長】 ありがとうございます。じゃあ、藤本委員お願いします。

【藤本委員】 まず、今回のコンセプトの全体像は、多分、大多数で受け入れられるというか、多くの方が課題だと思っていらっしゃることかと思います。例えば、世田谷では子どもたちの遊び場について、20年以上前から取り組まれていますし、品川区には「おばちゃんち」という取り組みがあり「おばちゃんち」に子供たちとママたちが遊びに来るといふ地域の居場所のような仕組みがあったり、全国でこういった事例があります。ですが、もっと広く地域として一つにまとまってモデル化されたようなところまでいっているものがないように思いますので、逆に水俣でそういった地域のあり方として理想のモデルまでたどり着けるといいなと、漠然としています。思います。

それから、先ほど松永先生がおっしゃられていた動機づけをどうするかというところでは、例えば、大人のみなさんに対し、「子供たちに、今のこの水俣で遊べるものを教えてあげてください」というのは、割とスムーズに動機としてはたらくと思います。あとはコミュニケーションの仕方、教え方のところをどうカバーするかという、私は実際に今それを意識してやっているのですが、私の取り組の一つでは、退職をされた学校の先生方に活躍をしてもうらうようにしています。

この水俣には、地元熊大、鹿大などの教育学部出身の先生が多いですね。そういった退職教員の先生方がたくさんおられますので、それをきちんとネットワーク化して、そういった方々をキーマンとしながら地域の高齢者の方々を巻き込んでいくという形がいいのではないかと思います。時々自慢話になってしまう地域のおじいちゃんも確かにいるんですけども、そこをうまく先生がサポートしてくださったり次につなげていただくと、うま

くいくのではと思います。

あと、キーワードについては、「3世代育みタウン」ということと、植木先生のご意見に「リレーする」というのがありました。実は私の法人はハートリレープロジェクトといいますが、まさに全てをつなげる——地域をつなげる、それから3世代をつなげる、思いも文化もつなげる、もっと言うと、実は、教職をリタイヤされた先生方にお手伝い頂き、さらには現在の教育学部の学生さんにボランティアで来てもらって、そこで教師の卵と退職した先生とが、教授の仕方を伝授する、つなげてもらうということも狙っています。このように「つなげる」というキーワードにすごくこだわってつけた法人名、法人名というか、このふるさと水俣で取り組もうとしているプロジェクト自体をそう思っています。ハートリレープロジェクトという名前にはそういう由来があります。

もう一つ加えると、実は水俣も人口流出の進んでいるまちで、私自身が実際に東京に移り住みました。そういった人間でもふるさとのことを思っていて、こうやって戻ってくる。つまり、水俣と、都会やほかの地域をつなぐようなものもあれば、出ていった先の出身者の人たちがまた戻ってきてくれる、もしくは何かのときに手伝ってくれる。今回の地震でも、東京にいる水俣出身者のグループは何とか情報交換をしながら動いていますので、そういうネットワークも活用しながら、「つなげる」「リレーする」というのは、いろいろな方向で広がっていくのではないかと思います。

【永松座長】 ありがとうございます。植木委員の思いが、今のご説明でよくわかりました。ありがとうございます。

それでは、勢一委員。

【勢一委員】 私も、基本的に交流が大切だというのは非常に理解していて、しかし、それをうまくやるための仕組みをつくるというのが大変難しいということに同意しているところです。スローガンとしてはとても明確でわかりやすいけれども、具体的にどうするかは、みんながかなり頑張らないといけないんだろうと思います。

参加するということが第一歩として大切なのですが、動機づけという点では、先ほどポイント制というアイデアがありましたけれども、何か目に見える目標があって、それをみんなでクリアしましょうというコンセンサスが必要であり、単に交流しましょう、健康になりましょうだけでは難しいと思います。自治体によっては、何々日本一を目指しましょうとか、何かの率が何%以上をすることを目指しましょうということで取り組んでいるところもありますので、何か数値目標のようなもので、できれば少しずつ達成感が得られる

ような、歩みが見えるような形の数値目標みたいなものが設定できると一つわかりやすい目標になると思います。

最近、歩くとポイントになるという仕組みを始めている携帯電話会社もありますので、ICTなどで個人レベルでもそういう数値目標にアクセスできるようにして、今日はこのくらいだった、明日はもっと頑張ろうというようにやれると役立つと思います。

もう一つ感じたのは、動機づけとあわせて、参加の場を何か得ることができればということです。イベントをやりますから、この日にこの時間に来てくださいというのはもちろんいいのですが、日常的にふらっと立ち寄れるような交流できる場があるというのが、実は日々の生活の中では大切だと思います。

私は福岡市に住んでいるのですが、福岡市では角打ちという文化がこのところはやっています。もともとあったのですが、最近若い人の間でもはやっていて、東京のほうだと角打ちというと「何それ」とか言われるのですが、酒屋さんがお店の一部を開放して、そこで酒屋価格でお酒をちょっと飲める、ちょっとしたおつまみも出てくるというので、仕事の帰りにふらっと立ち寄ってとか、飲み会の後に2次会で立ち寄るといった場所として結構まちのあちらこちらにあります。

私も近所に行きつけの場所があるのですが、非常に楽しい場なので、いろいろな方が来るので、確かに説教をするような方もいたりするのですが、現役で仕事をしている人たちも来るし、リタイアして悠々自適に過ごしている方も来ます。そういう方々が、1杯飲みましょうという乗りでそこに集まって、しかし、そこでいろいろな話をしてるうちにビジネスができ上がったりとか、みんなでイベントに出かけることになったりということがままあるのです。

そのように、何かを目的とした場ではないけれども、ふらっと立ち寄って、そこに集ったことによって、その人たちの中のアイデアで何か新しいことができるとか、やりたいことがやれるとか、今日ちょっと嫌なことがあったなと思ったときにストレス解消のための話ができるというぐらいでもいいのです。

角打ちというお酒の場なんですけれども、私がいつも行っているところは家族で経営している酒屋さんで、その娘さんたちが角打ちの経営にも参加しているので、5時から開いていて、早い時間は子供さんを連れてちょっと立ち寄る人もいて、ソフトドリンクもあるので、子供同士もちょっと交流しています。座る場所ではないので、1杯飲んでさっさと帰るのが普通ですが、昼間はカフェみたいな形で設定すれば、もう少し汎用性が

あるのかなと思っている次第です。

私からはとりあえずこのくらいです。

【永松座長】 ありがとうございます。確かに、地方に行けば行くほど部屋の中で飲む習慣があって、オープンじゃないんですね。都会ほどカフェテラスのようなオープン系が多いですね。水俣にオープン型のそういうところがあるんですかね。お茶を飲むところでもいいですが。

【水俣環境アカデミア（古賀所長）】 ワインバーは一つを見つけました。

【望月所長】 水俣は大体、お店の中というイメージですね。

【永松座長】 大体そうですね。確かにそれも一つの方法だと思います。

それでは、せつかく今日は古賀所長にもお出ましいただいておりますので、お願いします。

【水俣環境アカデミア（古賀所長）】 私は隅っこで聞かせていただこうと思っておりましたが、角打ちというのは懐かしいですね。私を指導した主任教授だった方が、最初から飲み屋に連れていくと高いからというので、若い者を連れて行くときは、5時から第1ラウンドというので、スルメ1本で二、三杯飲まれた気がします。

一つ、交流の場について思ったことがあります。私は3月まで熊本県立大学でいろいろな地域貢献、あるいは学生を外に連れていくということをしておりました。それともう一つ、社会人の公開講座のようなもので、農業アカデミーというのを、県の農政部、それから農業研究センター、農業大学校と県立大学が一緒になって4年間走らせてきました。5月からさらに大がかりにするつもりでいたんですが、ちょっと今、計画が途中でとまっている状態です。学習の場として、非常に制約がないんです。授業料を取っているわけでもないし、例えば、トマトをつくりたい人、あるいは土壌改良をやりたい人、農薬の使い方を学びたい人が、非常にやわらかい柔軟な交流の場というものをそれぞれつくっていて、世代を超えて20代、30代、40代、50代と、均等にいろいろな人が集まってくれます。若い人はおやじの言うことは全然聞かない、あるいは、じいさんの言うことは聞かないんですが、何でもない経験者の方が、「トマトはこうやってつくって、土壌はこうやってつくるとね……」と言うと、もう目を輝かせて、横で見ている父親は、「あんなことは自分は毎日言っているのに、何で他人の言うことは良く聞くのか」とぼやいています。何となく場の雰囲気といいますか、セッティング次第ではいろいろなものができるのかなという感じを持っています。

伝えたいものと学びたいものが一致するところ、それが角打ちの場であるかも知れませんが、そういったものがセットされれば、もう少しやわらかい、交流拠点とかではなくて、何か新たなものができるかなというふうに、今までのお話を聞いて思いました。どうもありがとうございます。

【永松座長】 ありがとうございます。

実は昨日、伝統工芸館に行ったんですけれども、そこで竹かごをつくっている人たちがいて、所長が言われるみたいに、年代を問わずに自分で使う竹かご、つくっている物はそれぞれ違うんですけれども、自分がつくりたい物をつくっておられました。女性も、年配の人も、若い人も、黙々とやっておられて、不思議な連帯の輪みたいのができていて、好きでつくられているので、レベルが結構高いんですね。そういう需要先行型というんですか、これまでどちらかというところ、水墨画ですとか、水彩画ですとか、あらかじめ供給サイドのほうで決めて募集することが多かったわけなんですけれども、所長が言われたように、水俣に住んでいる人がどんなことを学びたいと思っているのかがわかってくると、うまく合うなというふうに今のお話を聞いて思った次第です。

それでは、後で思いついたということがおありになる委員の方、よろしくお願いします。

【松永委員】 今、皆さんからいろいろな意見が出て、何となく思っていたんですけれども、一つは健康なまちを目指すというときの目標みたいな話がありましたよね。私は、課題みたいなものを少し具体的に設定する。しかもクリアできそうな課題ですね、それを見える化するということをやったほうが取り組みやすくて、それをクリアしようという動きが出てくるんだろうと思います。

それと、ポイントの話がありましたけれど、これは広い意味の報酬だと思うんですね。ポイントも報酬ですし、誰かから褒められるのも報酬でしょう。別にお金とか物じゃなくていいと思うんですけれど、達成したときの何かご褒美的なものを見える化する。

もう一つは、交流そのものだと思うんですね。一緒に何かをやっているという実感ですね。例えば、一緒に竹かごをつくっていると、何かそこで生まれるものがあると思いますので、交流をどう実感し、見える化する。

この数年、ビジネスでゲーミフィケーションという言葉がはやっています。消費者を巻き込むためにゲーム化する、ビジネスにゲームの要素を持ち込むということです。そこでよく言われるのは、これをクリアしましょうという課題をゲームのように明確にあげる。そして、クリアしたときの報酬をあげる。そして、仲間と一緒にやっているという交流の

実感をあげる。お話を伺っていて、その辺を工夫すれば、全体としてのモチベーションだとか、インセンティブというところにつながるのかなという気がしました。

【永松座長】 ありがとうございます。そのほかにご意見はございませんか。

【藤本委員】 追加です。さきほどの角打ちについて、その子供版みたいなものが日常にあるといいなと思っています。実は、ちょうど、ふらっと立ち寄れるまちの中の自習室みたいな、「学習カフェ」というものをどう仕掛けていこうかなと思っています。

水俣の商店街はほんとうに閑散としています。昔は多分、商店街にみんな買い物に来て、そこで人々の交流があったんです。これは一つの事例というか、案の一つでしかないのですけれど、そういった商店街の空き店舗に、例えば、学校が終わった後に子供たちがふらっと立ち寄って宿題をしていく。そこに大人で教えてくれる人がいて……。宿題だけじゃなくて、多分いろいろな遊びがあったりしてもいいと思います。また、交流以外の一つのメリットとしては、塾に通えないような所得の低い子供たちの学習支援にもつながるかなと思っています。「カフェ」とよばれるものの中に、そういう子供が集えるようなカフェがあってもいいなと思いました。

私自身は勢一先生のように、よく、東京ではふらっと立ち寄るお店、「角打ち」とは言わないのですが、酒屋さんがやっている立ち飲みのお店でちょっと飲んで帰る、子どもたちのお迎えまでに、軽くできる交流という、そんな感じの立ち寄り方をしていますが、それは実際に仕事をするうえでもコミュニケーションの場としてすごくいいなと思います。

【永松座長】 水俣の課題が生活習慣病が多いということですので、先ほどの酒屋さんだと、逆に病状が進んでしまうと困ります。(笑)

ありがとうございます。これまで出た意見を集約しますと、基本的には、この6コマ目に書いてあります子供、保護者、あるいは高齢者、全てが元気で楽しく暮らすまちづくりという方向性は、皆さんに認めていただいているのかなと思います。こういう事務局の提案で、一応、視野の広さというのを、特定の世代に当てるのではなくて、広く3世代、場合によっては4世代になると思うんですが、それを見ながら、元気で過ごせるようなまちをつくっていくというイメージの方向で委員の皆様がよろしければ、次の議論に行きたいと思います。よろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

【永松座長】 ありがとうございます。

それでは、先ほどイメージといたしますか、もっと具体的にしたほうがいいのかという意見も

出ましたけれども、事務局で考えておられるイメージを説明していただいた上で、また委員の皆さんのご意見を伺いたいと思います。

【岩橋室長】 それでは、続きまして、資料4の7コマ目をごらんください。事務局による参考案といたしまして、「美しい環境のもとで」、仮称ですけれども、「3世代育みタウン」というネーミングに今はしております。

8コマ目にその趣旨を書いておりますので、先ほど先生方からご了解いただいた方向性、ご承認いただいた方向性をもとに、囲みの中の趣旨、ネーミングの決定に向けて議論をしていただきたいと思います。特に今日は趣旨が大事だと思っております。

8コマ目の囲みの中にいきまして、仮称3世代育みタウンは、マッチングポイントという言葉を用いておりますが、子供・保護者・元気な高齢者のマッチングポイントが多種多様に設けられ、日ごろから交流を重ねて、子供や保護者が健やかに成長し、高齢者の生活がいきいきと充実し、3世代がともに育まれているまちをイメージしております。

コンセプトは、顔の見えるこの美しいまちで、地域にあるものを活かして、子供を介した日ごろの交流によって、みんなの健康、これは前回からありますように、心や体、そして社会的な健康まで含めて、相乗効果を得ながらよりよく育んでいこうというものです。私たち大人からいたしますと、子供たちこそ大人の希望であり、逆に子供から見ると、私たち大人が希望だと考えております。大人から見ますと、子供や孫のためなら皆さんいい汗をかけると思っております。

多くの市民のうち、ターゲットは子供ですね、幼児から小学生ぐらいかなと思っております。さらに、保護者として、パパさん、ママさんという若い世代、そして、元気な高齢者です。特にフューチャーセッションで出たのは、リタイアした後の男性でした。男性に限らないんですけども、これらの人たちが自分から進んで、自発的に参加し、自分たちでこんなことをやったらいいというアイデアを出し合いながら交流できる場や、交流の内容、メニューといったものをつくり出して、数年かけてまちの至るところにそういうマッチングポイントをつくってほしいなと思っております。ここまでが大体8コマ目の「3世代育みタウン」の趣旨です。

次のページにちょっと小さい4コマを入れております。最初の9コマ目は、マッチングポイントの参考イメージということで入れております。

マッチングポイントとは、イメージですけれども、水俣市内のあちこちに多種多様な場があり、さまざまに違う曜日や時間、内容で用意されていて、コンビニのように、好きな

ところ、好きな曜日や時間に応じて行けるような場をつくりたいとイメージしております。

具体的には、これもまだまだ参考例なんですけど、左下にございます11コマ目のマッチングポイントの参考例というところに、5種類の場を考えております。これらは本研究会における地域創生の三つ目の定義である「地域にあるものを活かす」ことで予算やルールの制約をあまり受けずに実現できそうなものです。このうち、今ないものは、フューチャーセッションでこんなのがあったらいいなということで出たものです。

例えば、1番目の遊び場です。これは、今ある遊び場を使って、そこに遊びコーディネーターや遊びマイスターがいて、どんな遊びができるのか、場所や時間、遊びのメニュー、コーディネーターがいるとかいないとか、そういったものの地図とかリストをつくることによって、遊び場というものが一つのマッチングポイントになっていけると考えております。

二つ目のデイサービスは、これもフューチャーセッションの中で若いママさんから出ましたように、いつも同じ人から同じものを教わってもつまらないので、毎日同じデイサービスに行くのではなくて、今日はあっち、あさってはこっちと自分が好きなデイサービスに行けて、今日は手遊びを一緒にするとかメニューもそこそこにいろいろあって、いろいろ選んで行けたらいいなというものです。

デイサービスの下に地域リビングと書いております。地域リビングは今も水俣市内に二十カ所程度ありまして、国水研でもお隣の出水市に出かけて行って、実際に高齢者といろいろなことをやっております。理念としては、地域のリビングですので、若い人でも誰でもということだったんですが、今はどちらかというと高齢者向けのことをやっています。せっかくこのような場がありますので、時間や曜日、メニューを決めることで、既に二十カ所程度ある地域リビングをほんとうの地域リビングにしていけるのではないかと考えております。これは、特に水俣ならではのものかなと思っております。

③にふ・ふ会ということで、括弧書きしました。これは、パパさんの会、ママさんの会と思っただけといいです。これもフューチャーセッションで出ました。ママさん同士は、井戸端会議という言葉が昔からあるように盛んに情報交換されると思うんですが、男性の若いパパさんは仕事優先でそうもいかない方が多いと思います。それで、特に若いパパさん向けの会をつくって情報交換をすると、とてもいいのではないかとということです。

次の夢語り8コマ劇場とは、子供から大人まで、自分はこれから先こんなことをやりたいということで、自分はこんなことをしたい、大人になったらこんなふうになりたいとい

うのを4コマ漫画をつないで8コマぐらいにして、プレゼンの場を設けたらどうかというものです。例えば、水光社というデパートがありますので、その一角で曜日とか時間を決めてやるといったことです。劇場というネーミングですが、そういうこじんまりとした場をイメージしております。

そして、④の田舎体験予備校は、既に今、藤本委員がやっていらっしゃるようなことを想定していて、結構どこのまちでも体験型はあろうかと思えます。

⑤は各種イベント会場ということで、いろいろなイベントがあると思えます。

1枚めくっていただきますと、参考資料1というものがついておりまして、ここにこれまで行いました「フューチャーセッションの成果」というタイトルで、交流にかかわるアイデアを類型化しております。この①～⑤というのは、右のほうに書いておりますように、交流頻度の高いものから交流頻度の低いものまでを順番に並べています。

①はマイスター型という名前にしておりますが、これは先ほどの①～⑤に対応しております。遊び場関係です。②のライフスタイルと書いておりますのが、先ほどのデイサービス関係、③のチャレンジ型というネーミングにしておりますのが、先ほどのふ・ふ会や、夢語り8コマ劇場、④の体験型というのが、田舎体験予備校というふうに、先ほどのマッチングポイントの①～⑤に対応するようにつくったのが、この交流にかかわるアイデアの類型です。

この参考資料1の①～⑤を、実際にフューチャーセッションで出たアイデアを書いております。これはあくまでも参考資料ということですので、一つ一つの説明は割愛して、先ほどの「3世代育みタウン」の趣旨についていろいろと先生方からご意見をいただいて、肉づけをして決めていきたいと思っております。

【永松座長】 その後で、8ページの一番上の仮称のところも、今日決めるわけじゃないんですけども、ネーミングについて植木委員から事前にご意見をいただいておりますので、一緒に議論したいと思えます。事務局のほうからお願いします。

【岩橋室長】 行き渡りましたでしょうか。メールでアイデアとご意見を募集いたしまして、植木委員から事前意見の二つ目ということで、「3世代育みタウン」のネーミングについて、黒い星印以下の案をいただいております。ごらんのとおり、漢字の文字とそれを読んだときの響きといいましようか、そういうのを植木委員はいろいろとお考えくださったんだと思うんですが、多分私がこれを一つずつ読んだとしても、委員の思いがそのまま直接伝わるかどうかは非常に怪しいと思えますので、とりあえず皆さんにこの状態でご紹

介するにとどめさせていただきたいと思います。

【永松座長】 ありがとうございました。

それでは、8ページに関して、特に下のほうに要約が書いてございます。点線囲みです。ここでちょっと漏れというもおかしいんですけども、先ほどあった「リレー」「つなげる」ということがあります。どちらかという、「交流」というのは、ある意味で短期的というか、そのときそのときのという視点なんですけれど、「リレー」というのは、もっと長いスパンでの世代間、あるいは違う人たちという、かなり視野が広い形での「つなぐ」と。だから、ここにも「つなぐ」とか「つなげる」という言葉が入ったほうが良いというのが藤本委員のご意見だったと思います。

そのほかに視点とか視野、あるいは行動の集約的な言葉として、こういう捉え方を入れたほうが良いのではないかというご意見があれば、教えていただきたいと思います。

【勢一委員】 コンセプト自体はもちろん賛成ですけども、今日のお話ですと、子供、保護者、元気な高齢者というのが挙がっていますね。言葉の定義としては保護者というのは実はもう少し範囲が広いのですが、普通は親御さん、子供のお父さん、お母さんをイメージすると思います。そうすると、この三つにはまらない層をどうするか。例えば、単身者はどれにも入らない。厳密には、大人であれば未成年を保護するという立場になるのかもしれませんが、一般的には入ってこない。あと、例えば、大学生ですね。しかも他地域から来ているような大学生とかは登場する場がない。この保護者という表現は違うものにしたほうが良い気がします。いい表現は思い浮かばないですが、もっと広く人々が全部入るものだと思います。子供を育むというのは、親以外の人たちがみんな育てていくのがいいわけですから、単身者であっても、大学生であっても一緒に育んでもらえるというのが、多分この「育みタウン」の趣旨だと思うので、もう少しターゲットが広く入っていることを示せるような表現のほうが良いと思います。

【永松座長】 元気でない高齢者はいいのかということもありますね。よく考えると高齢者はどこかしら病気を持っているので、どこまでが元気な高齢者かという。あと、保護者も、行政的に父兄とか親御さんとは言わないとかいう関係だと思うんですけども、おじいちゃん、おばあちゃんなんか保護者に入るので、ここの区分けについては、結果として全部入るようにしたほうが良いのではないかというご意見ですよ。

ありがとうございます。ほかにございませんでしょうか。藤本委員、ございませんか。

【藤本委員】 「3世代育みタウン」というコンセプトをベースとしても、突出したタ

一ゲットとして誰を主役にするかというもの。それを出さないと、逆にぼんやりしてしまうのではないかと思います。私はどうしても子供がメインになってしまうんですけど、「次世代をつくっていく子供たちをみんなでこういうふう育てていきませんか」というように、例えば、主役を子供に絞ってしまうほうが良いように思います。要は、主役を誰にするかを決めたネーミングにして、サブテーマで「3世代育みタウン」があるという表現の仕方、それを支える水俣市という形のほうが良いような気がします。そのほうがおじいちゃんたちも目標を持ちやすいというか、自分のためにやるんじゃない、子供たちのために一肌脱ごうと思ってもらえるのではという理由です。

【永松座長】 二つの考え方がありますね。一つはこういうふうに並列に並べるのと、もう一つは主役とサポーターというのではないですけど、そういうふうにメリハリをつけたほうが良いのではないかとのご意見ですね。これはどっちにするかなという感じがあると思いますけれども、その件、もしくはそれ以外の件でも構いませんけれど、牧迫委員、何かございませんか。

【牧迫委員】 聞いていましたけれども、今のはなかなか難しい課題ですね。そういった意味でいくと、マッチングポイントというのが必ず子供と接点があるところという定義になるのかなとか思ったりします。マッチングさせたポイントがいっぱいあるよというコンセプトには私はすごく賛成で、いいと思うんです。ごめんなさい、ちょっとそれるかもしれませんが、これは最終的にどこかが「ここがマッチングポイントですよ」という発信をすることを想定してらっしゃるんでしょうか。

【永松座長】 ちょっと意味がよくわからなかったんですけど。

【牧迫委員】 「ここはマッチングポイントですよ」というのを、誰かが発信するということですか。そういうのがいっぱいありますという発信だけということなんでしょうか。

【望月所長】 一応、この研究会の目的は、市に提言を行い、市の施策に役立てるということです。そういう意味では、例えば、3世代のマッチングポイントという発想で交流するというときに、今、既に市にはこれだけの場所があるということについて、あわせて意見を出すというイメージです。それを具体的にどう使うかというのは市の施策の話になると思います。我々の提言としては、少なくともこういうものは使えるのではないかと考えています。フューチャーセッションなどを含めまして、室長のほうで、どの程度あるのかを調べている状況です。

【大竹総務課長】 仮に、ここでいうところのマッチングポイントについては既存の水

侯市にある資産を活用するということになるとすれば、発信しないとどこに何があるかわからないので、いずれにしても発信することになるのではないかと思います。

【牧迫委員】 わかりました。その条件と言っているのかわかりませんが、こういうところですよということについて、ここでいう対象に含まれる方々と認識の相違があったらまずいので、それも含めて、ここが主役ですという推し方を考える必要があると感じます。答えにならない意見で済みません。

【望月所長】 藤本先生からご意見をいただいたところですが、高齢化も進んでいますし、生活習慣病もいっぱいありますし、それぞれの世代にそれぞれ大きな課題があるのではないかと思います。それをあわせてということですので、今のところの考えとしては、どこに焦点を当てるというよりも、全部に対してそれぞれがそれぞれ発展していけるようなというイメージを持っていたところです。ただ、現実にはそれをやるにはちょっとぼんやりしているということであれば、ぜひご意見をいろいろいただきまして、方向性などもまたいろいろと考えさせていただきます。

【永松座長】 多分、所長が言われたみたいに、それぞれに課題があって、それをうまく結びつけると子供のためにもなるし、お年寄りの課題解決にもなる、そういうマッチングの仕方を考えましょうという趣旨だと思います。今のだとさっき言った不健康な高齢者は除かれますので。

【望月所長】 マッチングポイントに出てこられるというイメージで「元気な」と言っておきまして、それが言葉としていいかどうかはまた別でして……。

【永松座長】 だから、例えば「元気」を取って、参加者の幅を広げてやるというか、ちょっと言葉の工夫が要るのかなと思います。

松永委員は何かございますか。

【松永委員】 3世代というのはすごくいいと思います。3世代というのは、単純に子供と保護者と高齢者というだけではなくて、ずっと未来につないでいくという意味だと思います。読んでいて、この年代が入っていないじゃないかみたいなことではなくて、全ての世代がつながっている、しかもそれが未来にずっと続いていくというイメージです。

もう一つ、もうちょっと子供に焦点を当てたほうがいいのではないかというお話があって、仕掛けとしては私もそれがいいと思います。ただ、表に出すのは3世代でいいと思います。子供って、変な言い方ですけど、武器なんですよね。いろいろな事例を見ている、子供を使うとみんな集まってくるとか、子供のためだったら頑張っちゃうという気が

しますので、子供を媒介に使うというか、触媒に使うというか、そういうのはすごくいろんな方向に展開できそうな気がしています。

前回の会議のときにも少し言いましたけれど、島根県の海士町は典型的な過疎の島ですけど、子供、特に高校生を軸にしてまちづくりをやっています。海士町では「大人が変われば子供が変わる。子供が変われば未来が変わる」と言われています。高校の授業で子供がいろいろな地域に入って行って、漁業の話の聞いたり、昔の話の聞いたり、一緒に何かやったりしています。そうすると、最初は、「そんなの、外のよく知らん地域から高校に入ってきて何の役に立つの」って言っていた人たちが、だんだん変わっていく。昔の話を聞かせてくださいとか、一緒に何かやりましょうと子供から言われたら、嫌な気はしませんよね。「うちのまちもまだいろいろあるじゃないか」「将来、もしかしたらいけるかもね」というふうに変ってきて、それでまた子供が変わっていくというのがあります。だから、子供をうまく使えたら、ほんとうに3世代がつながっていく気がします。

もう一つ、ちょっと気になるのは、さっきの交流のアイデアの類型というのがあって、この五つの類型自体はすごくおもしろいと思うんですけど、これといわゆる「健康を育む」のところ、健康づくりみたいところは濃淡がある気がしています。濃淡があるのはいいと思うんですけど、でも、コンセプトとして健康づくりというのを置くのであれば、それと間接的にでもどうつながっていくのかを考えておかないと、単なる交流にとどまってしまって、少し焦点がぼやけてしまう気がします。

【永松座長】 ありがとうございます。確かに、子供が有効なツールであるというのは、今回の地震でも、避難所なんかで子供たちが掃除をしたり、あるいは配給を手伝って無邪気に笑いながらお握りを配っている子供たちを見ると、周りの大人、疲れ切った大人たちも元気が湧いてくるというんですか、自分たちもやらなければいけないという。子供には不思議な力がございますので、子供自身の経験にもなって、かつ大人もそれによって元気が湧いてくる、そういうやり方は確かに非常に大事だと思います。

古賀所長から何かご意見ございませんか。

【水俣環境アカデミア(古賀所長)】 永松先生も苦労されているんだなというのを今のお話で感じました。避難所での経験というのは確かにあると思います。

子供というのは、自分に子がいなくても、あるいは孫がいなくても、和むものだと私は思っております。それから、今、水俣には高校生がだんだんと少なくなっています。この地域から出て行って、出水あるいは八代という他の地域まで通学するような状況で、何と

か頑張らないといけないという意識は高まっております。この4月に水俣高校が、済々黌に続いて県下で2番目にスーパーグローバルハイスクールに採択されました。先生方も非常に緊張して、校長先生はちょっと悲壮な顔をしておられたと思いますが、これは一つのきっかけといいますか、弾みになるのではないかなと思います。それを地域の方々はどう応援していくかですね。高校生が他の地区に出ていかない、あるいは、他のところから呼び込めるのではないかという希望さえ出てきていますので、こういうステージが設定されることは意味があると思います。

【永松座長】 ありがとうございます。途中からお聞きになったので、石原委員はちょっとわかりづらいところがあったかもしれませんが、今話をしていたのは、資料4の8ページのあたりです。ほかの委員の方々のお話を聞きながら、何かご意見があればお願いしたいんですが。

【石原委員】 ありがとうございます。ちょっと地震の関係で大学のスケジュールが変わりまして。申しわけございません。

私は、「3世代育みタウン」というのは悪くないなど、この資料をいただいたときから思っていて伺っておりました。ポイントとしては、松永先生がおっしゃったことに近くて、未来に続いていくというところがポイントかなと思っております。水俣のアイデンティティーといいますか、特に国水研の研究会としては、水俣病というものから見える水俣の姿というのは、単に美しい私の大好きな水俣というだけではなくて、次世代に美しい、持続可能な環境を残していこうという発想だと思いますので、未来にきちんと受け継いでいくという視点が見えるのはすごくいいなと伺っておりました。

多世代ということだと思んですが、しかし、多世代だとぼやっとなりますので、3世代が続いているようなイメージで、響きとしてよいと思います。

そして、子供に焦点を当てることに関してなんですけれども、音として、「3世代育みタウン」は、3世代が育まれているように聞こえますし、同時に3世代で次世代を育むというイメージにもとれますので、両方の意味にとれて悪くないと感じました。

あとは先生方がおっしゃったことと同じことを感じまして、私も独身の女性ですが、そのように、子どもをもつ親のみならず多様なライフスタイル人も含めていただけると大変うれしいなど、思ったところがございます。結論としまして、私の提案としては、例えば、「子供・大人・高齢者のマッチングポイント」というふうに一般化してしまう、その次の箇所を「子供や大人が健やかに成長し、暮らし」などというふうにはいかがでしょうか

か。

それがポイントで、あとちょっと一つだけ気になった点があって、もしかして説明があったときにいなかったかもしれませんが、「美しい環境のもとで」という言葉も使われますか。スライド7の上のところですね。

【永松座長】 これは事務局としては例えばということです。

【岩橋室長】 前回だったでしょうか、環境は達成してもなお、これからも重要なキーワードであり続ける、それを活かしていかないのはもったいないというご意見がありましたので、それをここに入れていきます。環境都市でもありますので。単なる3世代のまちだけだと、どこにでもあるかもしれませんが、「この美しい環境のもとで」という冠をつけることで少し差別化できるかなと。ただ、このネーミング自体は仮称でございまして、事務局のたたき台ですので、この辺は自由に意見をいただいて、肉づけをしていきたいところです。

【石原委員】 わかりました。ありがとうございます。そういう意味では、自由な意見として、「美しい」よりは「未来につながる環境」とか「命が育む環境」というように、ちょっと言いかえたほうがいいかなと感じました。

なぜかといいますと、実際、私は水俣は非常に美しいと思って移住したんですけれども、実際問題として、水俣病のときの、例えば埋め立て地の環境の問題もあります。人々の心の中にただ美しいと言って済まされない気持ちもあるかもしれない中で、例えば、今、原発災害の被災地の福島などでも、安全だと思っている人と安全じゃないと思っている人がいるのに「安全だ」と言うと、ちょっとうそのように聞こえてしまうのと同じで、さまざまな意見がある中で、すべての意見の根底に通底する本質を何か表わすような何らかの表現ができればいいのではないかと思いました。

以上です。

【永松座長】 ありがとうございます。

水俣病が起きる前の自然が戻っているのかと言われるといろいろ疑義があるところもあり、違う言葉であらわしたほうがいいだろうというご意見でございました。ありがとうございました。

これまでのご意見の中で、ここの文章の中ですけれども、大まかに言うと、基本的にはこれでいいんだけど、この中に藤本委員が言われた「リレー」「つなげる」、世代間とか域内外につなげるという意味合いも含めるべきだということと、石原委員のほうからも、

現在だけではなくて未来につなげていく、現在と未来のマッチングポイントというんですかね、そういう視点もあったほうがいい、それから、成長という視点も必要だろうということですが。

それから、暮らすという言葉はないんですけども、幸せに暮らすという意味が入ったほうがいいだろうというご意見もいただきました。委員の皆様からいただいたご意見を踏まえて、文言等について事務局には改めて検討してもらいたいと思います。

それから、一言で何というかという話ですけども、今日、委員の皆様からいろいろ意見がございました。それで、こんな名前だったらどうだろうかといういいキャッチフレーズをもし思い浮かばれましたら、事務局まで連絡をいただきたいと思います。幾つか候補を並べて、この次の会合の前に、事前に事務局からメールで皆様にお送りしますので、自分はこれがいいというご意見を事前に用意していただきまして、絞っていききたいと思います。

【望月所長】 済みません、各委員から一ついただけますでしょうか。

【永松座長】 はい。先ほど松永委員から目標の見える化ということがございましたので、早速、キャッチフレーズを最低一つ以上という見える化を図っていききたいと思います。これが一番いいと思われる方もいらっしゃると思います。その場合には、これよりも劣るんですけどという案を無理に出していただく必要はないんですが、それぞれイメージをお持ちだと思いますので、見える化し、期限も切ってお尋ねします。いろいろなキャッチフレーズが出るかもしれませんが、それをもって皆さんで議論して決めていくことができたいと思います。

じゃあ、8ページのこの部分については、基本的にはこれで了承いただいて、あと、委員の皆様から出たここに載っていないような視点については、修正して盛り込むということによろしゅうございましょうか。

(「異議なし」の声あり)

【永松座長】 ありがとうございます。

それでは、時間に限りがございますので進めます。

先ほど、いろいろなことをやっているけれども、なかなか広がらないという背景があって、動機づけ、仕掛けが大事でしょうという話とか、あるいは子供たちが乗ってくるようなものでないとなかなか難しいとかいうご意見が出ました。委員の皆様方は実際に取り組みおられますので、残りの時間を利用して、これでいうと8ページの先の具体的な部

分に入っていきます。アイデアフラッシュのレベルで構いませんので、例えば、こういうことをやってみるとうまくいくのではないかというアイデアについて、委員の皆様、自分がやったこと、あるいはほかの地域のことでも構いませんので、ご存じのことがあれば発表いただいて、次の会の足がかりにしたいと思います。

先ほど松永委員が、子供をうまく使うと成功すると言われました。松永委員がご存じの例で、こういうことをやってうまくやっているというのが何かあればご紹介いただければと思います。

【松永委員】 それは交流を促すとか、それでたくさん参加するとかいうことでよろしいんですか。健康に関係なくてもいいですか。

【永松座長】 はい、構いません。

【松永委員】 私が直接かかわっているものでいうと、子供というか、高校生なんですけど、高校生マイプロジェクトというプロジェクトがあります。もともと東京のNPOがやっていたんですけど、それに今年は東北と北九州を加えて3カ所でやっています。要するに、高校生が住んでいる地域の課題を解決するために自分自身のプロジェクトをつくりましょうというものです。

スタートアップとして2泊3日で合宿をやって、北九州でやったのは高校生が50名程度西日本から集まってきて、大人が20数名、それから大学生も20数名でプロジェクトづくりを手伝います。高校生4人に大人と大学生が1人ついて、2泊3日で自分のプロジェクトをつくっていくわけです。最後の日には全員が発表をします。その後、高校生たちは自分の地域に帰って、それを実施します。10月ぐらいに合宿をやって、1月ぐらいまで実施をして、また北九州に集まってきてその発表会をやります。そこで代表を選び、彼らは東京の本選に行って、そこでアワードが決定します。けっして一等賞をつくりたいわけではなくてロールモデルをつくるという意味です。

まず、合宿で発表したときに、市長も含めて聞いていた大人がみんな泣きました。感動して全員泣いたんです。高校生も泣いてましたね。地域に帰っても、その熱い思いを持って、地域の大人たちを巻き込んで一生懸命にやるわけです。

何でそれがうまくいったのかというと、さっきの子供の力ですよ。高校生が何かやりたいというのを、大人がちょっとだけ手助けする。そこに大学生が入っている意味が大きくて、高校生と我々大人だけだとちょっと距離感があるんだけど、大学生が入ることで少し気楽な関係が築ける。その距離感がすごくよかったというのと、50人ぐらいの初めて

集まった高校生の仲間意識や連帯感が出てくる。出てくるような仕組みをつくっているんですね。とにかく、連帯感をつくる、参加感をつくる。それと、地域とのつながりを徹底的に考えさせる。地域で何ができるか。そして、自分の地域に帰ってやってねという、アクションまでつなげる。企画だけではなくて、「アクションを競え」というのがキーワードなので、アクションまでやる。その後のフォローもずっとやっています。近くだと集まったりしますし、遠い場合はインターネットを使ってインターネットゼミみたいなことをやっています。そういうのが一つですね。

それから、東京にNPOのアフタースクールというところがあるのですが、そこで学童保育に高齢者を入れて、昔の遊びを教えるみたいなことをやっていますが、誰でもいいわけじゃなくて、希望する方に、やり方をレクチャーしています。コミュニケーションのやり方みたいなプログラムを組んでいます。学童保育ってわりと施設の中で完結してしまうんだけど、それと地域をつなげる、地域で放課後のいろいろな場をつくるということをやって、うまくいっています。そこには試行錯誤してずっとつくり上げてきたプログラムがあるんですよね。「はい、じゃあ、ここに集まってやってください」だとあまりうまくいきません。そのプログラムをどう設計するかだと思います。

もう一つ言うと、次の会議ぐらいに出るんだと思いますけれど、これをやる主体ですよ。誰がやるのかで随分変わってくると思います。場をデザインして、動かすのを誰が担うのかということですね。

【永松座長】 確かにそのとおりですね。提言というのが、提言してそのまま終わることが多いのは、やる人がいないということが最大の問題で、多分、この次ぐらいに、水俣の地域の人的資源を活用することが前提になるので、一体どういう形であれば水俣でいろいろな取り組みができるか、次回、地元の委員の皆様を中心に議論いただきたいと思います。

そのほかに何かございませんでしょうか。こういうところはうまくいっているとか、自分でやってみてうまくいったとか。

【牧迫委員】 少しヒントになりそうな取り組みとして、私どもがやっていますが、4万5,000人ぐらいの規模の市において、既存の活動団体だとか、商店だとかで、高齢者に特化していますけれども、高齢者の集いの場所というか、そういうスペースをつくるということだけを条件に、その場を市が健康の自生地という名称で認定をしています。それに登録したところには看板を掲げていて、いろいろなところに出てほしいというのが一番

大きな目的なんですけれど、そこに行くところとちょっとポイントがあって、自生地に行ったという判こをもらって、それを集めて、年に1回応募するようなシステムになっていて、それであるべくいろいろなところに出かけていくというわけです。

そこで何をやるかは各自生地が決めていきます。人が増えることで経済が回るような場所があれば、公民館だとかに健康のためだけに集まるという、いろいろな形態がありますけれども、とりあえず高齢者が集まれる場所というところで認定をして、市内に何十カ所ありますよという形でいろいろ広報して、なるべくたくさん出かけてもらう。

我々はその市民の方々に歩数計をお配りしております。その歩数を読み取る機器を各自生地に設置しております。それで、実際にどれぐらい、どういうところに行っているのか、あと歩数、フィジカルなアクティビティをどれぐらいしているかを記録させていただきまして、最終的には、少し時間がかかりますけれども、それをやっている方のほうが要介護の認定率が低いだとか、そういうアウトカムを出すことで、こういうのをやったほうがいいんだというムーブメントというか、意識づけに結びつけたいと考えています。今回のものに少し活かせるところもあるのかなという形でご紹介させていただきました。

【永松座長】 確かに、ポイントをためたら特典があって、なおかつ健康になるというのはいい場所だと思いますね。

そのほかに何かありますか。

【石原委員】 たくさんあるのですが、三つだけに絞ってと思います。

一つ目は、私がたしか国立保健医療科学院にいたときに、健康政策のさまざまな地域の取り組みをまとめたときにおもしろいなと思いましたのが、松永先生の話と近いのですけれども、大人健康行動を変えるときに、例えば、子供が学校で体にいいものとかをいろいろなことを学んできて、その子が家でお母さんに話す、大人に話すということで、子供をまず教育し、そこから大人を変えていくというのも非常におもしろいなと思ったんですね。それを応用して水俣でやってみたいなとちょっと思いました。

水俣の健康づくりということで、フィジカルな健康以外に、前からも出ていましたメンタルな健康あるいはソーシャルな健康といいますか、水俣で、水俣病問題からの学びも含めて、いい意味での誇りとアイデンティティーを持って生きていけるということに取り組みたいです。若い世代というのは、大分水俣病に関する教育を受けて、そういうことがあったからこそ、いい水俣をつくってほしいという素晴らしいアイデンティティーが

育っていると思うんですけども、高齢の世代、そして40代後半以降はまた違う思いを持ってらっしゃいます。そういう中、例えば、高齢のおじいちゃんに子供が「昔の水俣ってどうなの」って聞きながら、もしくは、おじいちゃん、おばあちゃんが「あんたたち、どんなことを学校で習っているんだい」ということを聞きながら、水俣病とか水俣に住む者としてのアイデンティティーみたいなことも含めて交流していけるような場があるといいなと一つ思います。通じたかわからないですが、一つはそれです。

二つ目のおもしろいと思った事例は、いわゆる休耕田の問題と労働力の問題です。二つあります。

一つには、ある地域のことですが、お母さん世代が働いていらっしゃって、保育を地域のおじいちゃん、おばあちゃんがされるといって、高齢者の方と若い子供のマッチングを活かした保育システムがあります。

また、もう一つおもしろいなと思いました事例が、問題のある高校というか、就職でなかなか地元につながっていかないような非行少年などもいる学校における取り組みです。その子たちを導く中で、地元の休耕田を地域のおじいちゃんと高校生、若者が一緒に耕すことで、高校生も高齢者には悪いことができないし、孫の気持ちで温かく迎えてもらえるとても心が育まれる、そして高齢者の方々も高校生の若者がいると労働力になるし、未来を伝えていくということになる、さらに休耕田が復活するという、とてもおもしろい取り組みだと思いました。それが二つ目です。

三つ目は、水俣におもしろい取り組みがあると思うんです。全国でもよく耳にする地元学、それは水俣から始まったという方が多いわけです。あの仕組みというのは、地元のことをよく知っている方々、つまり主に高齢の方かと思いますが、そして、外の若者、中の若者が一緒に話しながら、地元にあるものを探して、そして地域の資源を発見して、地元にあるものを組み合わせたり磨いたりしながら、新しいプロジェクトもしくは新しい商品をつくっていくという仕組みです。三世代で育む地域のプロジェクトといえると思います。せっかく水俣から発祥したと言われて全国の地域づくりでも注目されていますので、そういうものをもう1回見直してみると、とてもおもしろいかなと思います。

以上です。

【永松座長】 ありがとうございました。勢一委員、お願いします。

【勢一委員】 私の大学でやっているプロジェクトが一つありまして、私が直接担当しているわけではないのですが、商店街と大学生をつなぐというプロジェクトです。姪浜商

店街と私の大学で行っている「姪浜西南大学まち」というプロジェクトで、商店街の人たちが行ういろいろなイベントのときに、大学生がボランティアでそこに参加して一緒に地域活動をします。大学生としては、そこで社会人と触れ合うことによって、社会人を養うという形で、地域活性化をやりながら大学生も学びましょうというプロジェクトに取り組んでおり、経済学部が担当しています。

おもしろいのは、その商店街にM'sコミュニティという名前の交流の場をつくって、そこでいろいろなイベントを企画する点です。地域の人と集まって企画を考える場でもあります。また、関心があるときにそこに行けばいいという緩やかな感じでもやっているそうです。交流の場を考える上では参考になるかなと思いました。

先ほどの子供を育むというのはとてもいいキーワードで、そこが戦略だということになりましたけれども、子供の範囲を少し広げて高校生や大学生まで加えると、このあたりは実働部隊になるのですね。活動を支える力になりますので、そのあたりも一緒に巻き込んでやれば、活動の担い手の候補になると思います。

今ご紹介したプロジェクトは教育目的であるので、実はこれには大学から少し活動資金が出ていますから、それを使ってやれるので回っているのですが、これを全くのボランティアで全部やってくださいとなると、ちょっと苦しいのかなと思ったりもしています。具体的な点については、担当の先生をご紹介しますので、お話を伺っていただければと思います。

以上です。

【永松座長】 ありがとうございます。複数の委員から、若い人たちのパワーというか、行動力というのが出ておりました。私の大学も2年前から起業のコースができたんですけれども、授業中はひたすら受動的なのに、どこにこんなパワーがあるんだろうというぐらい、考えられないような生き生きとした目と行動力を見せています。中学、高校、大学とそうなんですけれども、基本的には座学で、本人の関心のある・なしにかかわらず、授業を受けている学生が多いんですけれども、逆に言うと、社会において自分の考えやプランを実際にやってみる空間を与えると、今の若い人たちでも予想以上の力を発揮するなど最近非常に感じていて、先ほどの高校生の話もそうですけれども、ほんとうは教育がその機会を与えないのにそれができていないので、この中で幾つかでもいいので、具体的に子供とか若い人たちにチャンスを与えるようなプログラムの提言も、この委員会で考えていいのかなと感じた次第です。

いろいろ意見が出ましたが、そろそろ時間が近づいてきました。先ほど言いましたように、この次はもっと具体的な話に移っていくと思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。今日は、先ほどの8ページの基本的なところについてご了解をいただき、一部修正をするということで、会議を終わらせていただきたいと思ひます。

それでは、事務局にお返ししたいと思ひます。

【望月所長】 1点だけよろしいですか。

先ほどいろいろといただきましたご意見について、既存のもの、パブリックされたものでも結構です、また概略で構いませんので、活動の具体的な内容をいただけたら非常に参考になるかと思ひます。事務局宛てにお願いできたらと思ひます。

【永松座長】 もしお手持ちの簡単な資料とかがあれば、こういうところに載っていますとか、URLを教えてくださいとかですね。

【望月所長】 それでも結構ですので、よろしくお願ひいたします。

【牧迫委員】 NHKで「地域づくりアーカイブス」というサイトがありまして、いろいろな視点からの地域の活動を多分二、三分ぐらいの動画でそれぞれまとめてあります。ここで出しきれなかった情報が結構あると思ひますので、参考になればと思ひます。

【永松座長】 ありがとうございます。

【岩橋室長】 それでは、次回の研究会につきましては、また皆様に日程についてお伺ひのメールを差し上げますので、ご協力をお願ひいたします。

次に、議題につきましては、本日決めていただきました「目指す地域社会像」を実現するために何をどうすればよいかという点が一つです。もう一つは、これらの取り組みの先に一体どのような展望を描くことができるのかです。その2点を予定しております。

私の個人的な思いといたしましては、例えば、北九州市さんが環境への取り組みをされて環境未来都市になられて、アジアにいろいろと活動を広めておられますように、ここ水俣での取り組みが、アジアの公害都市のお手本なりモデル、先駆例となるような提言にまとめたいと思ひています。

それでは、以上をもちまして本日の会合を閉会いたします。本日はご多忙のところお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。お忘れ物なきよう、よろしくお願ひいたします。ありがとうございました。

— 了 —